

には煤が付着する。16はスリ鉢高台部で、5号溝出土。底径21.3cm、現存高3.6cmを測る。高台は付け高台である。内面は櫛目を密に施し、外面はヨコナデ調整である。17はスリ鉢底部で、10区出土。底径17.0cm、現存高4.5cmを測る。高台は付け高台で、貼り付けた後ヨコナデ調整を施している。内面には1単位9条の櫛目をすき間のないように密に施している。なお、そのほか、19号土壌出土のスリ鉢口縁部片は粗い櫛目をもつが、端部が丸く終わる。

スリ鉢のうち16・17の内面に密に櫛目を施した品は、時期的に遅れるものであろう。

18は器高の高い鉢下部と思える品で、14～16F区出土。底径17.8cm、現存高10.2cmを測る。内外面ともヨコナデ調整である。火熱を受けている。

甕（図版第48-19～21、第109図19～21）19は甕口縁部で、14E区暗褐色土層出土。口径39.2cm、現存高5.4cmを測る。内外面ともヨコナデ調整する。20は端部を欠失する甕口縁部で、9D区出土。口径42.5cm、現存高5.6cmを測る。調整は32と同様である。21も甕口縁部で、9C区表土層出土。現存高7.3cmを測る。やはり調整は同様である。

これらの甕口縁部は、いずれも朝倉氏遺跡出土の大部分の甕より古相を呈する。

瀬戸・美濃焼（図版第47・48・54、第108図）

瀬戸・美濃焼には、灰釉小皿2個、天目茶碗4個、水注1個、おろし皿1個などがある。

灰釉小皿（図版第47-22・23、第54-22、第108図22・23）灰釉小皿2個は、ともに34号土壌埋土中層出土（第70図2・3）。22は口縁部の一部を欠失しており、口径9.2cm、底径4.2cm、器高2.4cm、容量52mlを測る。口縁部は内湾ぎみに外上方に立ち上がった後、端部が外反する。高台は削り出しで、その内部にはより土痕を残す。見込みにはカタバミの印花文をもつ（図版第54-22）。内外面には細かい貫入をもつ灰緑色の釉を施し、見込みには釉だまりがある。口縁端部の一部に油煙痕が付着しており、燈明皿である。23も同様な完形品で、口径9.5cm、底径5.4cm、器高2.6cm、容量57mlを測る。やはり口縁端部の一部に油煙痕が付着しており、燈明皿である。

天目茶碗（図版第48-24・25、第108図24・25）24は天目茶碗の底部で、15F区大溝埋土上層出土。底径4.5cm、現存高2.2cmを測る。高台は角ばった削り出しで、付け根に段をもつ。外面下部を除いて黒褐色の鉄釉を、外面下部には鬼板を施した品で、高台の付け根にも釉の流れがある。25は天目茶碗の体部下半で、16F区包含層出土。現存高2.4cmを測る。やはり高台の付け根に段をもつ。外面下部を除いて黒褐色の鉄釉を、外面下部には鬼板を施した品である。なお、他の天目茶碗片のうち1個は、11号土壌出土である。

水注（図版第47-26、第108図26）26は注口部を欠失する水注で、23号土壌出土（第58図1）。口径2.4cm、底径3.2cm、器高6.5cm、容量30mlを測る。断面六角形の注口部と紐作りの縦耳をもつ。底部は糸切り底である。外面下部を除いて暗褐色の鉄釉を施し、外面下部は露胎である。

東播磨系陶器（図版第48、第109図）

東播磨系陶器は、同一個体をなすこね鉢片2個を数える。

こね鉢（図版第48-27、第109図27）27はその口縁部で、6号土壌出土。口径28.8cm、現存高3.6

cmを測る。ほかにも体部の破片1個があり、ともに内外面はヨコナデ調整である。内面には磨減がある。

伊万里焼(図版第48、第108図)

伊万里焼には、茶碗片など6個体がある。

茶碗(図版第48-28、第108図28) 21は染付茶碗下部で、14B区暗褐色土層出土。底径4.0cm、現存高3.0cmを測る。内外面には長石釉を施している。

不明国産陶磁器(第108図)

不明国産陶磁器片は3個を数える。

鉢(第108図29・30) 29は鉢で、10F・11D両区出土。底径7.8cm、現存高2.4cmを測る。外面下部と底面はへら削りであるが、その他の部分を除いて灰釉を施している。30も鉢で、15F区大溝土層出土。底径9.4cm、現存高2.3cmを測る。高台内部を除いて青磁釉を施している。

中国製陶磁器(図版第48、第108図)

中国製陶磁器には、青磁片6個、白磁片1個、染付碗片2個などがある。

青磁碗(図版第48-31・32、第108図31・32) 31は青磁碗上部で、24B区表土層出土。口径14.6cm、現存高3.8cmを測る。灰緑色の釉を薄く施している。32は青磁碗下部で、14B区2層出土。底径4.6cm、現存高2.4cmを測る。珠光青磁で、見込みには猫掻き手文をもつ。底部下面を除いて、灰緑色の釉を薄く施している。そのほかの品はいずれも小断片であるが、35号土層出土の青磁碗は龍泉窯の製品と思える。蓮弁様縁をもち、淡青色の釉を厚く施している。

白磁碗(図版第48-33、第108図33) 33は白磁碗で、9C区表土層出土。現存高4.0cmを測る。内面の口縁部と見込みとのさかいには段をもつ。外面下部を除いて薄灰色の釉を薄く施している。

染付碗(図版第48-34、第108図34) 34は染付碗下部で、33号土層出土。底径5.2cm、現存高2.3cmを測る。景德鎮窯系の民窯製品で、高台と見込みと体部外面には文様をもつ。胎土には鉄分を含むようで、高台のへら削り面が赤く焼けている。

(中司)

第5表 土師質土器観察表

器形	番号	法量 (cm)	形製の特徴	手法の特徴	胎土・質	色調	備考
小皿	1	口径8.3 器高1.9	・口縁部は底部とのさかいの外 面に稜を形作り、短く内湾気 味に立ち上がる。	・口縁部内外面は回転ナデ調 整。 ・底部外面は未調整。	・砂粒を含 まない。 ・焼成良好	淡褐色	・器形の3/4を 欠失。 ・6号土層出土。
	2	口径8.6 器高1.9 容量41	・口縁部は底部とのさかいの外 面に稜を形作り、短く内湾気 味に立ち上がる。 ・底部はわずかに上げ底をなす。	・口縁部内外面は回転ナデ調 整、見込みはヨコナデ調整。 ・底部外面は未調整で、一部 に巻き上げ痕が残る。	・砂粒を含 まない。 ・焼成良好	褐色	・完形品 ・6号土層底出 土(第40図3)
	3	口径9.0 器高1.8	・口縁部は底部とのさかいの外 面に稜を形作り、短く内湾気 味に立ち上がる。	・口縁部内外面は回転ナデ調 整、見込みはヨコナデ調整。 ・口縁部外面に巻き上げ痕が 残る。	・赤色粒を 若干含む。 ・焼成良好	明褐色	・器形の1/2を 欠失。 ・6号土層出土。

第2節 遺物各説

			・底部外面は未調整で、板目痕が残る。		
小 皿	4	口径 8.3 器高 1.7 容量 39	・口縁部は底部とのさかいの外 面に稜を形作り、短く上外方 に立ち上がる。 ・器形はゆがむ。	・肘あて成形。 ・調整は不明だが、口縁部内 外面は回転ナデ調整であら う。	・砂粒を含 まない。 ・焼成やや 不良。
	5	口径 8.9 器高 2.1 容量 59	・口縁部は上外方に外反した後、 短く内湾気味に立ち上がる。	・油煙のため調整不明だが、 口縁部内外面は回転ナデ調 整であろう。	・砂粒を含 まない。 ・焼成良好
	6	口径 9.5 器高 1.6	・口縁部は短く上外方に立ち上 がる。	・口縁部内外面は回転ナデ調 整。 ・底部外面は未調整。	・赤色粒を 若干含む。 ・焼成良好
	7	口径 10.0 器高 2.5 容量 66	・口縁部は短く内湾気味に立ち 上がる。	・油煙のため調整不詳だが、 口縁部内外面は回転ナデ調 整。 ・底部外面に指頭圧痕が残る。	・砂粒を含 まない。 ・焼成良好
皿	8	口径 14.9 器高 3.1	・口縁部は底部とのさかいの外 面に稜を形作り、短く内湾気 味に立ち上がる。	・口縁部内外面は回転ナデ調 整。 ・底部外面は未調整。	・砂粒を含 まない。 ・焼成良好
	9	口径 15.5 器高(2.8)	・口縁部は底部とのさかいの外 面に稜を形作り、短く内湾気 味に立ち上がる。	・口縁部内外面は回転ナデ調 整。 ・底部外面は未調整。	・砂粒を含 まない。 ・焼成良好

2) 木器類

木器には、装身具、食膳具、容器、建築部材、土木部材などがある。ただ、出土総数があまり多くないので、ここでは上記の種類別に分類せず、逐次列記する。

さて、こうして機種別に分けた主要な木器の内訳は、次のとおりである。

- | | | | | | |
|--------|--------|-----------|------|--------|------|
| (1) 木 | 櫛 1枚 | (2) 漆器蓋・同 | 椀 9個 | (3) 木 | 椀 1個 |
| (4) 曲 | 物 7個 | (5) | 箱 1枚 | (6) 折 | 敷 3個 |
| (7) 不明 | 板材 7枚 | (8) 柄 | 杓 2個 | (9) 木 | 筒 1枚 |
| (10) と | め 串 1本 | (11) 組 | 材 1本 | (12) 礎 | 板 1枚 |
| (13) | 杭 3本 | (14) 角 | 材 2本 | | |

以下、各出土品を報告するが、総数39個のうち 不明板材・杭・角材の一部のように顕著な特徴をもたない品は省略し、33個についてのみ記述する。

木櫛(図版第52-28、第113図28) 平面形の肩部がわずかに丸みを帯びる角張った木製の横櫛で、9号土壇底出土(第43図1)。幅8.0cm、高さ3.5cm、厚さ0.9cmを測る。上端から0.8～1.0cm離し

て両面に横の刻線1条を彫り、その線に向かって71本の歯を鋸で引き出している。

平面形が丸い肩をもち、室町時代後期以降の品より古い形態をとどめる。

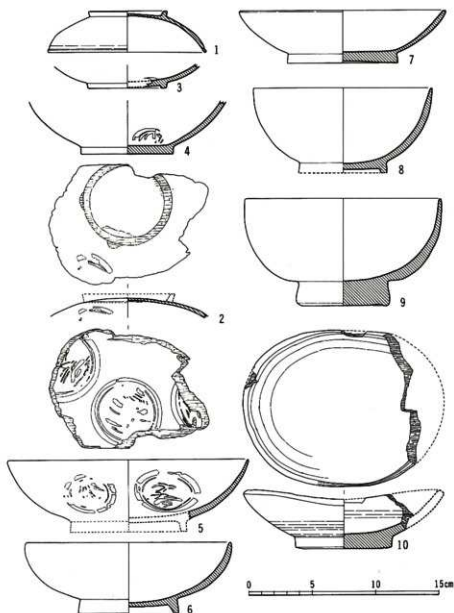
漆器蓋・同椀、木椀（図版第49-1～9、第50-10、第54-2・5、第110図1～10） 漆器類には後述の曲物容器もあるが、ここではロクロ成形の蓋・椀を一括して説明する^④。漆器蓋は2個、同椀は7個、木椀1個を数える。

漆器の蓋・椀には、内外面とも赤漆あるいは黒漆の同色の品、内外面赤漆と黒漆とで塗り分けた品、内外面とも黒漆でその上に赤漆で文様を描いた品などがある。後者の品には8のように文様が判然としない例もあるが、いずれも円形で囲んだ文様を描いている。4の文様はおそらく鶴丸文の簡略化されたものであろう。また、2の蓋と5の椀は、全く同一の外径5.6cmの二重圏で囲む文様をもち（図版第54-2・5）、同一土壌から出土しているので、まずセットをなすものであろう。9は強く突出する平高台をもつが、朝倉氏遺跡出土の同様な椀のような高台内の浅い削りとは存在しない。口径や器高からしても飯盛り椀であろう。これらの蓋・椀は総数は少ないが、器形の違いは飯、汁物、煮物など、用途の差を示すものであろう。

なお、それぞれの詳細については、第6表を参照されたい。

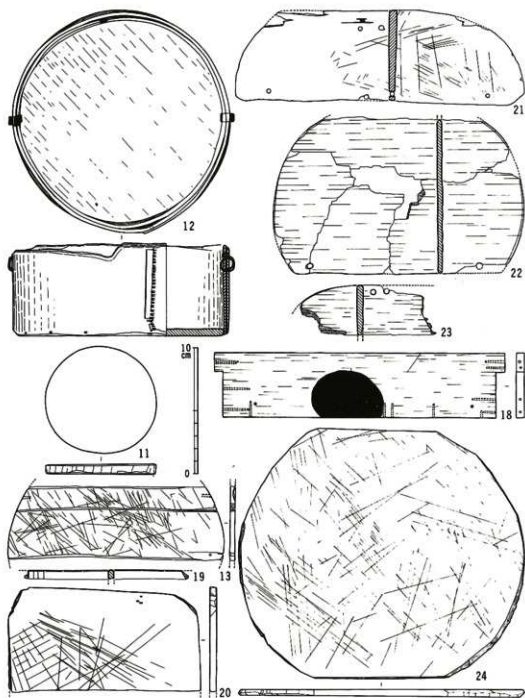
曲物（図版第50-11～13、第51-14～17、第54-17、第111図11～13、第112図14・15）
曲物は7個を数える。そのうちには、小型・中型・大型の3種がある。

11は小型曲物の底板で、18号土壌底出土（第53図1）。径8.5～8.8cm、厚さ0.8cmを測る。12は漆塗りの中型曲物で、11号土壌底出土（第46図3）。口径16.8～17.1cm、器高7.3cm、容量1.124mlを測る。この曲物は、樺皮綴じの二重の側板を、径16cm、厚さ0.6cmの側板に12本の木釘で止めた品である。内側の側板は、長さ61.8cm、幅7.3cm、厚さ0.3cmの薄板を右回りに巻き、両木口からそれぞれ9.8cm余りを木口に近づくほど薄くなるように削って重ね合わせ、外面の木口から2cm離れた箇所を幅0.4cmの樺皮で6回綴じて曲物にしている。外側の側板も同様な薄板を用いて、外面の木口から0.5cm離れた箇所を幅0.2cmの樺皮で24回綴じて曲物にしているが、綴じ目が内側の側板の綴じ目とは円周上の反対側に位置するように重ねている。そして、内外の側板の綴じ目と円周を四分する位置2箇所、幅0.7cmの樺皮で内外両側板を綴じ合わせている。全体に漆の剥落部分が多く、側板の上下両端部が丸みを帯びるなど、使用の激しさを窺わせる。13は同じ中型曲物の底板断片で、29号土壌底出土。径17.1cm、厚さ0.4cmを測る。側面に2個の釘孔をもつ。両面には多数の切り傷を残す。14は大型曲物の小断片で、2号掘立柱建物の中央部柱穴内出土。現存長6cm、同高5cm、厚さ0.6cmを測る。1.1～1.6cm間隔で縦の切り目を入れている。15も同様な大型曲物の小断片で、3号土壌出土。現存長19cm、同幅7.1cm、厚さ1.0cmを測る。0.9～1.9cm間隔で縦の切り目を入れている。この曲物には、9号土壌のような井筒の外側に巻いた薄板の断片34～41（図版第51-34～46）が相伴しているので、3号土壌の井筒として使用された可能性を残す。16は上部を欠失する大型曲物で、9号土壌の上部井筒である（第43図）。径約45cm、現存高24cm、器壁の厚さ0.7cmを測る。下端から0.5～1.2cm上位に15個の釘孔を穿つ。一部の孔には折れ損じた木釘も遺存し、内面には底板痕も遺存

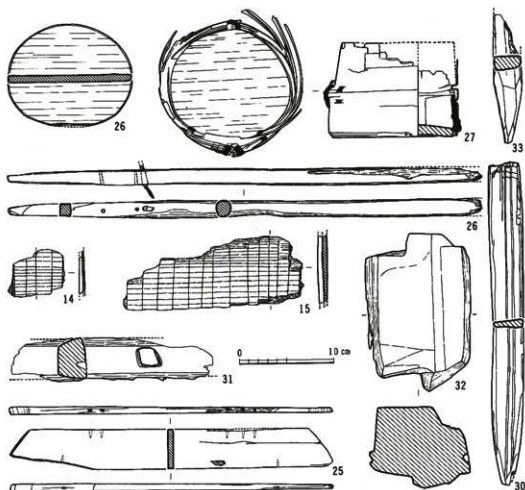


第110図 各土壙出土木器実測図1（縮尺1/3） 漆器蓋（1・2） 同椀（3～9） 木椀（10）

するので、底板を外して井側に転用した品であろう。側板はやはり右回りに巻き、両木口からそれぞれ5cm余りを木口に近づくほど薄くなるように削って重ね合わせ、内面の木口から10cm離れた個所を幅1.4cmの樺皮で2回綴じて曲物にしている。内面は、1～2cmの間隔で縦の切り目を入れるが、綴じ目には幅8.5cmの綴代を設けている。17も同じ大型曲物で、9号土壙の下部井側である（同図）。



第111圖 各土城出土木器実測図2 (縮尺1/3) 曲物 (11～13) 箱 (18) 折敷 (19～21) 不明板材 (22～24)



第112図 各遺構出土木器実測図(縮尺1/4) 曲物(14～15) 不明板材(25) 柄杓(26・27) とめ串(30) 組材(31) 礎板(32) 杭(33)

径約45cm、器高38cm、器壁の厚さ1.0cmを測る。側板は同様に右回りに巻き、両木口からそれぞれ14cm余りを木口に近づくほど薄くなるように削って重ね合わせ、内面の木口から10cm離れた箇所を幅1.7cmの棒皮で8回綴じて曲物にしている。内面は0.8～1.8cm間隔で縦の切り目を入れるが、綴じ目には幅5cmの綴てを設けている(図版第54-17)。なお、曲物ではないが、10号土壌でも井側の外側に巻く薄板の断片42～46個が出土している。

箱(図版第52-18、第111図18) 18は箱の側板で、20号土壌埋土上層出土。長さ23cm、高さ5.2cm、厚さ0.65cmを測る。両端は他の側板と組み合わせるため、下部に切り込みを設けている。両端、下端、側面下部にそれぞれ釘孔を穿つ。また、側板中央部に焼け焦げ痕が残る。

折敷(図版第51-19～21、第111図19～21) 側板1枚、底板2枚を数える。

19は折敷の側板の断片で、8号土壌埋土下層出土（第42図3）。現存長13cm、同高0.7cm、厚さ0.4cmを測る。一方の折端には、4条の切り目が残る。20は折敷の底板の半欠品で、9号土壌埋土下層出土（第43図2）。長さ15cm、厚さ0.55cmを測る。辺長からみて『貞丈雜記』にいう中角（五寸四方）にあたる。隅は三手切で、側辺沿いに側板を綴り付けるための3個の小孔を穿っている。転用されたものとみえ、両面に多くの切り傷を残す。21は隅丸長方形の折敷の底板の半欠品で、10号土壌埋土下層出土。長さ23cm、幅7.3cm、厚さ0.6cmを測る。長辺沿いに4個の、弧線沿いに2個の小孔を穿ち、後者に外接して綴り付けた幅0.3cmの樺皮が残る。また、片面には切り傷が多い。

不明板材（図版第51・22～24、第52～25、第111図22～24、第112図25）不明板材は6枚を数える。そのうち何らかの容器の部材と思える4枚を取り上げる。これらはいずれも円板を木目と平行に1・2箇所切断した形を呈するが、曲物、桶などの蓋・底板の転用品か、あるいは折敷の底板の可能性をもつ。

22・23は折れ損じた品であるが、切断面に沿って2個の小孔を穿つ有孔円板で、19号土壌埋土上層出土（第54図1・2）。ともに21の折敷の底板に類似する。22は長さ19.8cm、現存幅12.5cm、厚さ0.4cmを測る。23は小断片であって、現存長10.8cm、同幅4.0cm、厚さ0.6cmを測る。24は2箇所を切断した円板で、18号土壌底出土（第53図2）。長さ22.7cm、幅19.9cm、厚さ0.6cmを測る。両端に多くの切り傷を残す。25は桶の組合式底板の転用品か。長さ34cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmを測る。長辺の一端を斜めに切断しており、両辺に6個の釘孔をもつ。

柄杓（図版第50・26・27、第112図26・27）柄杓は2個を数える。ただし、双方の曲物部の製作手法が異なる。

26は曲物部を破損した柄杓で、1号土壌底出土。柄も基端を欠失するが、現存長49.9cm、握部幅1.8cm、同厚さ1.9cmを測る。柄の先端から長さ15.5cm余りは先端ほど細くなるように断面四角形に削っており、先端から9～15cmの間に柄と直交する3個の横の小孔を穿つ。各孔には木釘が残る。柄の先端から23.7～29.5cmの間の下面は若干の擦り減りがめだつ。一方、曲物部は底板が楕円形で、復原短径11.3cm、長径13.0cm厚さ0.8cmを測る。側板は断片になっているが、内面に0.6～0.7cm間隔で切り目を入れ、幅0.8cmの樺皮で綴じた品である。27は柄杓の曲物部で16号土壌中段底出土（第51図1）。破損のため正確な計測地が得られないが、上端の短径11.9cm、長径13.0cm、高さ10.0cmを測る。26とは異なり、薄板を三重に巻き樺皮で綴じた品である。底板は円形で、径12.3cm、厚さ0.9cmを測る。底板と側板は、3箇所を木釘で止めている。側板の一部に柄を挿入する孔をあけ、その周囲を幅0.7cmの樺皮で綴じて補強するが、柄孔から4～5cm離れた箇所も樺皮で綴じている。側板である薄板自体の綴じ目は、柄孔と反対側に位置する。

木簡（図版第52・29、第113図29）主頭をなす木簡で、10号土壌埋土下層出土（第44図1）。長さ16.2cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmを測る。両面は丁寧に削られている。一面に「あらかの在所川へ」、他面に「安丸国方政所（花押）」と墨書されている。すなわち、前者は宛名、後者は差出人名である^③。

安丸という苗字をもつ家は、今日でも曾万布遺跡南西方約3kmの福井市下六条町に5軒ばかり

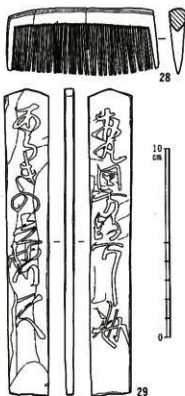
所在している。したがって、足羽川南岸の安九国方政所から、同北岸の「あらき」（福井市荒木町）の在所の「川一」という人物に送られた荷物の付け札であろう⁶⁾。

とめ串（図版第52-30、第112図30）30はとめ串で、10号土城埋土中層出土（第44図2）。長さ34.1cm、幅3.8cm、厚さ0.9cmを測る。割板材の一端を尖らせた品である。

組材（図版第52-31、第112図31）31は柄穴をもつ角材で、20号土城埋土上層出土。両端を欠失しており、現存長21.2cm、幅4.6cm、厚さ3.0cmを測る。柄穴は不整形をなし、1.7×2.0cmを測る。

礎板（図版第52-32、第112図32）32は礎板で、4号掘立柱建物柱穴出土（図版第21-4、第36図P8）。長さ16.7cm、幅10.9cm、厚さ8.6cmを測る。太い角材を切断した品で、上下両面とも凹凸をもつ。

杭（図版第52-33、第112図33）33は小型の杭の先端部断片で、6号土城出土。現存長13.7cm、幅3.0cm、厚さ1.5cmを測る。



第113図 各土城出土木器実測図3（縮尺1/2）木櫛(28) 木簡(29)

第6表 漆器・椀、木碗観察表

器形	番号	法量 (cm)	特 徴	備 考
漆 器	1	口径 12.6 器高 3.3	・口径部外面に浅い凹線をめぐらし、輪高台（径6.3cm、高さ0.5cm）をもつ。 ・器壁は厚さ0.2～0.4cmと薄く、全体に華やかな感じを受ける。 ・内外面とも赤漆塗りであるが、高台内部のみ黒漆塗り。	・器形の1/2を欠失。 ・34号土城底出土（第70図5）
	2	口径 (12.7) 器高 (1.7)	・器壁は厚さ0.2～0.3cmと薄く、輪高台（復原径7.3cm）をもつ。 ・内外面とも黒漆地に赤漆の文様を描いている。	・口径部・高台を欠失。 ・22号土城埋土中層出土（第57図1）
漆 器	3	口径 (11.6) 底径 6.3 器高 (2.0)	・低い輪高台（高さ0.4cm）をもつ。 ・内外面とも黒漆地であるが、内面の一端に赤漆文様の一部が残るので、内外面に文様を描いているのであろう。	・器形の大部分を欠失。 ・23号土城底出土（第58図3）
	4	口径 (15.5) 底径 7.3 器高 (4.3)	・平高台（高さ0.5cm）をもつ。 ・内面は黒漆地に赤漆の文様（現存3個）を描いている。鶏九文か。一方、外面はほとんど本地が出ていて一部に黒漆が遺存するので、本来黒漆地に赤漆文様を描いたものであろう。	・口径部を欠失。 ・33号土城埋土中層出土（第68図2）。
椀	5	口径 19.2 器高 (4.8)	・輪高台をもつものと思える。口縁部は緩く内湾しながら上外方に立ち上がる。 ・内外面とも黒漆地に赤漆の文様を描いている。赤漆の文様は2と同様。	・器形の大部分を欠失。 ・22号土城埋土中層出土（第57図2）。

漆 器	6	口径 16.5 底径 8.0 器高 5.7	・輪高台（高さ1.2cm）をもち、口縁部は強く内湾しながら上外方に立ち上がる。 ・内外面とも黒漆塗り。	・ほぼ定形品 ・22号土壌底出土（第57図3）。
	7	口径 16.4 底径 8.8 器高 4.2	・口縁部は緩く内湾しながら上外方に立ち上がる。 ・平高台（高さ0.7cm）をもつが、底面は上げ底となり端部に1条の沈線がめぐる。 ・底面を除いて黒漆塗り。	・口縁部の1/2を欠失。 ・8号土壌埋土上層出土（第42図1）。
	8	口径 14.2 底径 7.0 器高 6.8	・輪高台（高さ0.8cm）をもち、口縁部は強く内湾しながら直立気味に立ち上がる。 ・内面は赤漆塗り、外面は黒漆地に赤漆の文様を描くが剥落。	・器形の1/2を欠失。 ・11号土壌埋土上層出土（第46図2）。
椀	9	口径 15.6 底径 7.4 器高 8.5	・強く突出する平高台（高さ1.9cm）をもち、口縁部は強く内湾しながら直立気味に立ち上がる。 ・内面は赤漆塗り、外面は黒漆地の上に赤漆塗り。	・ほぼ定形品 ・33号土壌埋土中層出土（第68図3）。
	10	口径 15.9 × 12.4 底径 7.6 器高 4.7	・平高台（高さ0.9cm）をもち、底面端部に1条の沈線がめぐる。口縁部は緩く内湾しながら上外方に立ち上がる。 ・平面形は楕円形、側面形は両端部が上がる。 ・木地のままである。	・口縁部の一部を欠失。 ・8号土壌埋土下層出土（第42図2）。

3) 石製品類

Ⅱ・Ⅲ・Ⅸ号遺構群などからは、石製品8個が出土している。それらを種類別に分けると、その内訳は次のとおりである。

- (1) 火 炉 2個 (2) 石 臼 1個
(3) 砥 石 3個 (4) 井 桁 1個
(5) 五 輪 塔 1基

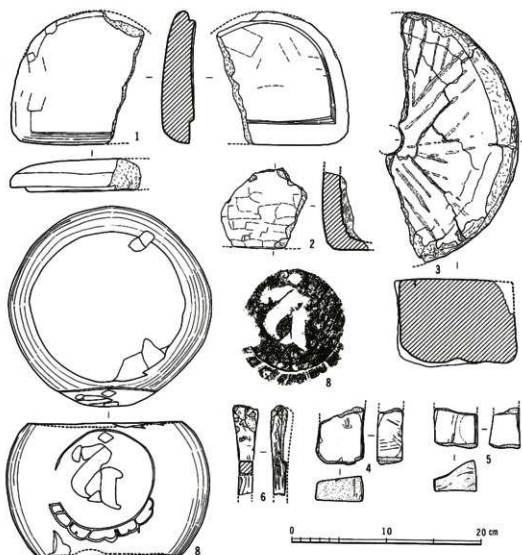
これらのうち火炉が火鉢の断片と思える品1個、砥石3個を除けば、いずれもⅨ号遺構群出土であることは注目に値する。

以下、各出土品を報告するが、上記の品以外にも火熱を受け かつ、使用痕をもつ3個の河原石についても記述する。

火炉（図版第53-1・2、第114図1・2）

火炉かあるいはそれに類する品は2個を数える。室町時代の越前の火炉は、平面がD字形、O字形、その他の3種に分けうる。

1は、D字形をなす火炉の蓋で、28号土壌埋土上層出土（第63図1）。一部を欠失しており、現存長13.9cm、最大幅14.0cm、厚さ3.4cm、重さ624gを測る。下面の周縁部に幅1.0～2.3cm、深さ0.5～0.7cmの身受け部を彫り込んでいる。緑色凝灰岩（笏谷石、以下同）製で、上面の周縁部や下面の中央部に若干の工具痕をとどめるものの、全体的に平滑に仕上げている。下面中央部に煤が付着する。2は変形の火炉の身部か火鉢の断片で、9B区表土層出土。側壁は丸みをもち、厚さ1.7～2.5cm、底部は平面で厚さ1cm前後、全体の重さ235.2gを測る。緑色凝灰岩製で、外面は若干の工具痕をとどめるが平滑に仕上げており、一方内面は粗い工具痕を残す。工具痕の刃幅は2cmを測る。外面



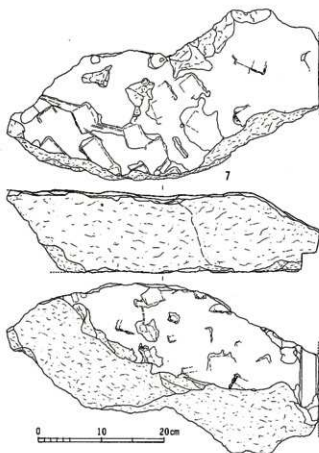
第114図 各土坑・包含層出土石製品実測図(縮尺1/4) 火炉(1・2) 石臼(3) 砥石(4～6) 五輪塔(8)

に煤が付着する。

石臼(図版第53-3、第114図3) 石臼の半欠品で、15号土坑埋土上層出土(第50図2)。復原径27.5cm、同孔径3.1cm、高さ9.3cm、重さ6.94kgを測る。溝は過度の使用によって痕跡的になっており、判別が困難であるが、左まわし八分画溝式の下臼^⑤と思える。輝石安山岩製である。残存部の側面中央に磨滅があるが、破損後別な用途に転用したものであろうか。

砥石(図版第53-4～6、第114図4～6) 砥石は中砥2個、仕上砥1個を数える。

4・5は同様な形態の中砥の断片で、ともに2号土坑埋土下層出土。1は、現存長6.1cm、幅5.0cm、



第115図 16号土壌出土石製品実測図(縮尺1/6) 井桁 (7)

kgを測る。平坦面では、端面に接して幅・深さとも約3cmのL字状の切り込みを施しているが、他の部材と組み合わせるための加工であろう。凝灰質泥岩製で、端面を除く2面は工具で粗く面を整えている。工具痕には、刃幅0.9cm、20cm、26cmの三種がある。このうち刃幅20cmの切削具は、火炉(第114図2)の調整でも使用されている。のみならず、朝倉氏遺跡出土の石仏や石塔などの石製品でも、多用されている事実を確認する。

五輪塔(図版第53-8、第114図8) 組合式五輪塔の水輪で、29号土壌底出土(第64図1)。径21.5cm、高さ14.1cm、重さ8.4kgを測る。側面の一部に円圈を乗せる蓮華文を削り出し、円相内には金剛界大日如來の種子「バン」を薬研彫りしている。この文様部分には墨を塗っている。凝灰岩製で、上下両面にはなお多少の工具痕をとどめるが、側面はより丁寧で滑らかに仕上げている。

河原石(図版第53-11) 本遺跡出土の河原石のうち3個が使用痕をもつ。

9・10は厚板状の河原石の断片で、ともに9号土壌下部井側下出土(第43図)。9は火熱を受けて割れているが、現存長10cm、同幅9cm、厚さ5cmを測る。片方の平坦面の一部が磨り減ってくぼん

厚さ2.6cm、重さ87.4gを測る。流紋岩製で、各面に利器の刃痕をとどめる。5は、現存長4.3cm、幅4.6cm、厚さ3.3cm、重さ61.4gを測る。やはり流紋岩製で、各面に利器の刃痕をとどめる。6は細長い小型の仕上砥の断片で、4号建物東方の柱穴内出土(第36図P₁₀)。現存長9.4cm、幅2.7cm、現存厚1.7cm、重さ43.5gを測る。良く使い込まれ、折端部は中細りしている。凝灰質泥岩製で、各面に利器の刃痕をとどめる

井桁(図版第53-7、第115図7)

16号土壌埋土上層出土(第51図2)。用途不明の大型石製品の断片であるが、大型井戸出土であることや、朝倉氏遺跡出土の石製井桁などからみて、本例も井桁(井筒)の部材と考えておく。全形が不明であるが、現存長49.5cm、同幅27.2cm、厚さ13.0cm、重さ12.82

でいる。10も火熱を受けて割れており、現存長12.8cm、同幅9.6cm、厚さ7.2cmを測る。両平坦面に顕著な研磨面があり、砥石あるいは石皿のような使用が考えられる。11は円礫で、8号土壌埋土上層出土（第42図）。長さ12.5cm、径9.4×10.0cm、重さ1.567gを測る。あたかも叩き石に使用したかのように、一方の端部が擦り減って面をなしている。やはり火熱を受けて、黒ずんでいる。

（中可）

4) 金属製品・土製品類

金属製品・土製品は、Ⅸ号遺構群のみの出土で、計4個を数える。その内訳は次のとおりである。

(1) 銅 銭 1枚 (2) 庖 丁 2本 (3) 土 鈴 1個

これらは、石製品の大部分とともに、いずれもⅨ号遺構群出土であることは注目に値する。

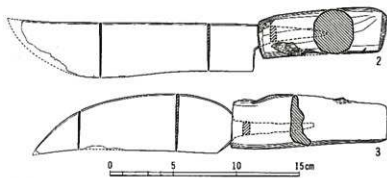
以下、各出土品を報告する。

銅銭（図版第54-1、第116図1）北宋銭の「聖宋元宝」で、33号土壌埋土上層出土（第68図4）。ごく一部に欠損があるが、径2.36cm、厚さ0.14cm、重さ1.51gを測る。篆書で、銭名を右回りで鋳出している。ちなみに、「聖宋元宝」の初鑄は1101年である。



第116図 各土壌出土金属器・土製品実測図（縮尺1/2）銅銭（1）土鈴（4）

庖丁（図版第54-2・3、第117図2・3）庖丁は種類が異なる2本がある。2は外湾する刃部をもつ庖丁で、15号土壌底出土（第50図3）。切っ先を欠失しており、現存長29.1cm、刃幅4.3cm、保存処理後の重さ155g（身部のみの重さ62.6g）を測る。身部は比較的薄く、棟幅0.2cmを測る。また、関よりの



第117図 各土壌出土金属器実測図（縮尺1/3）庖丁（2・3）

刃部長10cmは研ぎ減りが顕著である。片関で、茎は木柄に斜めに差し込んでいるため、柄部の基端は尻上がりとなる。この柄部は大人が握るのに丁度手頃な太さで、茎の一部が見える形に、棟側の柄部上端をコの字状削っている。刃部の研ぎ減りと照応するように、柄部の稜にも磨減がある。柄の一部には焼け焦げ痕も残る。3は内湾する刃部をもつ庖丁で、22号土壌底出土（第57図4）。切っ先と刃部の一部を欠失しており、現存長27.8cm、刃幅4.5cm、保存処理後の重さ120g（身部のみの重さ70.3g）を測る。2と同様に身部は比較的薄く、棟幅は0.2cmを測る。棟は大きく内湾する。両関で、石とともに鈍角をなし、木柄に平行に差し込んでいる。柄部の断面は不整形をなすが、使用

中に割れた可能性も残る。

中世に属す庖丁の出土例は、朝倉氏遺跡や広島県福山市草戸千軒遺跡など、2、3が管見にのぼる。また、『花下群舞図屏風』には庖丁を使って料理中の状態が描かれている。これらはいずれも2と同様な形で、刃幅が広く、薄く、かつ刃先が尖っていない点で共通する。こうした庖丁は、いわゆる菜切り庖丁と呼ばれる薄刃庖丁であって、当時でも最も一般的な庖丁といえる。ただ、3の庖丁もやはり薄刃庖丁である。しかし、類例に乏しく、いわゆる鎌庖丁である。

土鈴（第116図4）4は土鈴の断片で、23号土壇底出土（第58図2）。復原径約2.9cm、現存の重さ3.8gを測る。頂部に紐をつまみ出し、横孔を穿っている。こうした土鈴には、径5～7cmの大型品と、径2～3cmの小型品とがあるが、本例は後者に属するものである。（中司）

C 小結

以下、出土品について簡単にまとめておきたい。

土器類のうち、越前焼甕（第109図19～21）は、口縁部の形態から見て、室町時代前期の14世紀の品である。そして、土師質土器C類、越前焼スリ鉢（13～15）、瀬戸・美濃焼、東播磨系陶器、中国製陶磁器は、朝倉氏遺跡の継続時期（文明年間〔1469～1486〕～天正元年〔1573〕）と並行する。一方、土師質土器C類、越前焼こね鉢（10）、同スリ鉢（16・17）、伊万里焼茶碗（28）、不明国産陶器（29・30）は江戸時代の品であろう。

木製品では、漆器のうち蓋（第110図1）のように、室町時代後期まで降る品もあるが、全体的には朝倉氏遺跡出土品より古相を示している。また、木櫛も古い形をとどめており、同時期まで降らない。

石製品では、組合式五輪塔の水輪が注目に値する。ただ、これが出土した29号土壇では共伴する土器が出土しておらず、その詳細な時期比定は困難である。もっとも、29号土壇と同じ屋敷内に位置する他の土壇から室町時代後期の品も出土しており、この屋敷が同時期まで維持されているのは確かである。そこにこの五輪塔の時期を推測する根拠の一つがあり、大幅に古くすることは困難といわざるをえない。

一般的に組合式五輪塔は、一石五輪塔に先行するといわれている。それではこの水輪は一石五輪塔を多用する朝倉氏遺跡の時期より先行するのだろうか。あるいは、一石五輪塔とは階層差をもつものだろうか。

朝倉氏遺跡の位置する一乗谷の石造遺物の調査結果によれば、文亀・永正年間（1501～1520）から個体数が漸増し、天文年間（1532～1554）から最盛期を迎える。そして、朝倉氏の滅亡をもって石造遺物の造立は急激に衰退している。ところで、五輪塔総数1,605基のうち実に1,457基（約91%）が一石五輪塔であるという。つまり、朝倉氏が一乗谷に居住していた時期には、越前に特徴的な笏谷石で、無数の一石五輪塔が製作されているのである。

曾万布遺跡の周辺では、当遺跡に隣接する春日神社境内、北西方集落内の宝樹寺境内、現集落北西方の墓地、さらに、曾万布東方の荒木別所集落北西方の墓地などに、それぞれ若干の一石五輪塔

が散在している（図版第3参照）。その記年銘は、明応年間（1492～1500）から大永年間（1521～1527）である。すなわち、朝倉氏遺跡における石造遺物造営のそうした傾向は、曾万布遺跡周辺部でも同様である。

したがって、まず29号土壇出土の水輪は、朝倉氏遺跡の時期より先行する可能性を考えなくてはならない。（中司）

注

- ① 土器・陶器・磁器ごとの区分ではないこうした分類の仕方には矛盾が残すが、煩雑になるのを避けるため、あえて整理した名称を用いていない。
- ② 土器・陶磁器に限らないが、室町時代の出土品については、朝倉氏遺跡調査研究所の小野正敏・水野和雄・岩田 隆・南 洋一郎の各氏の教示による部分がある。
- ③ 朝倉氏遺跡調査研究所 1975 『一乗谷朝倉氏遺跡』。
- ④ 漆器については、東京芸術大学工芸科漆芸部六角人墳氏のご教授による部分がある。
- ⑤ 仮に、この木簡が荷物の受取人である「川一」の屋敷内に廃棄されたとすれば、Ⅵ号遺構群は川一の屋敷跡ということになる。
- ⑥ ちなみに、曾万布遺跡の位置する曾万布村字辰巳は、農道を挟んで荒木村字下尊保・中尊保に西接している。
- ⑦ 三輪茂雄 1975 『石臼の謎』。

图 版



(1) 成願寺山上より見た曾万布遺跡遠景

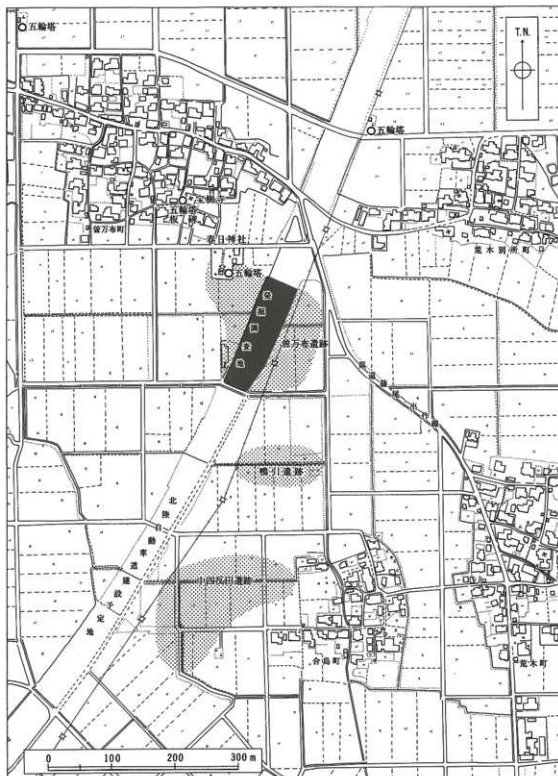


(2) 北方より見た曾万布遺跡調査区全景

图版第二 曾万布遺跡周辺地区航空写真



図版第三 曾万布遺跡の位置と周辺の遺跡分布図



(縮尺 1/6,000)



(1) 東方より見た土器の出土状態 (第1次調査)



(2) 西方より見た土器の出土状態 (第1次調査)



(1) 南方より見た 14F 区における土器の出土状態



(2) 北方より見た 15E 区における土器の出土状態



(1) 西方より見た1～5号遺構



(2) 北方より見た1号遺構における遺物の出土状態



(1) 北方より見た打製石斧の出土状態



(2) 北方より見た遺物取り上げ後の状態



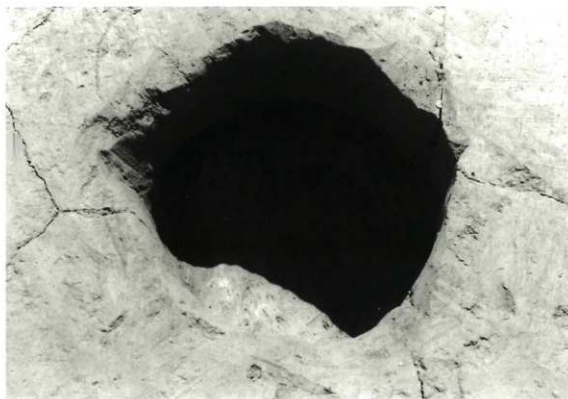
(1) 西方より見た2号遺構における遺物の出土状態



(2) 北方より見た3号遺構



(1) 北方より見た4号遺構



(2) 北方より見た5号遺構



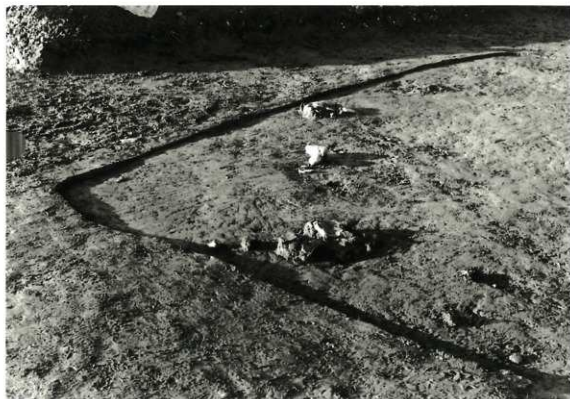
(1) 南方より見た6号遺構



(2) 西方より見た7号遺構における遺物の出土状態



(1) 南方より見た全景



(2) 南方より見た南西部における土器の出土状態



(1) 東方より見た全景



(2) 西方より見た全景



(1) 西方より見た土器・流木の出土状態



(2) 東方より見た土器・木器の出土状態



(1) 南方より見た石積・木組両遺構の出土状態



(2) 南方より見た木組遺構の出土状態



(1) 西方より見た木組遺構の出土採掘



(2) 北方より見た木組遺構下出土の細物



(1) 北方より見た木組遺構除去後の全景



(2) 東方より見た石積遺構と杭列



(1) 低湿地における礫の出土状態



(2) 西方より見た窪地全景



(1) 北方より見た状態



(2) 東方より見た状態



(1) 東方より見たI号遺構群



(2) 北方より見たII号遺構群



(1) 西方より見た2・3号土塋



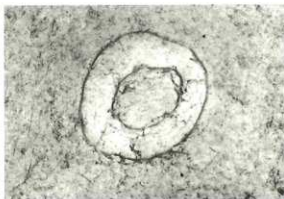
(2) 西方より見た38号土塋



(1) 北方より見た全景



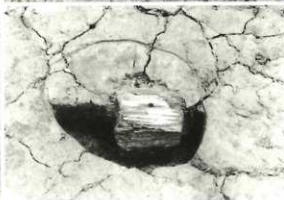
(2) 北方より見た4号建物 P_4 の埋土上面



(3) 北方より見た4号建物 P_1 の埋土上面



(4) 西方より見た4号建物 P_4 の埋土断面



(5) 西方より見た4号建物 P_3 の埋土断面



(1) 南方より見た4号土壙の土層断面



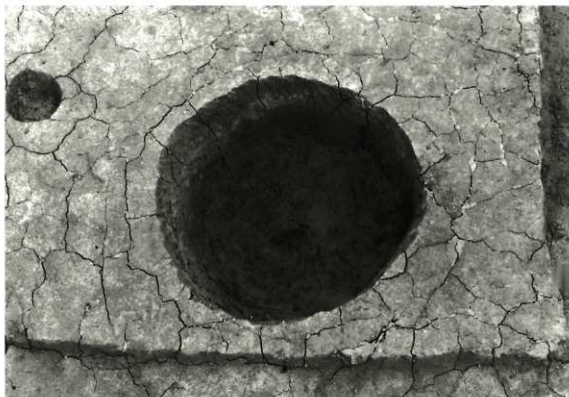
(2) 北方より見たV号遺構群と4号溝



(1) 北方より見たV号遺構群部分



(2) 西方より見た6号土坑



(1) 西方より見た7号土壙



(2) 北方より見た8号土壙



(1) 北方より見た状態



(2) 北方より見た井側全形



(1) 南方より見た10号土壙における遺物の出土状態



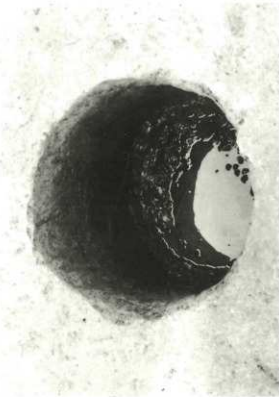
(2) 西方より見た11号土壙における漆器碗の出土状態



(3) 東方より見た11号土壙における曲物容器・土師質土器小皿の出土状態



(1) 東方より見た11号土壌



(2) 西方より見た12号土壌



(3) 北方より見たIX号遺構群



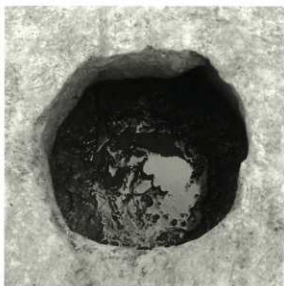
(1) 東方より見たIX号遺構群南部



(2) 北方より見た13号土塋



(3) 北方より見た14号土塋



(1) 東方より見た15号土壙における遺物の出土状態 (2) 南方より見た15号土壙における遺物取り上げ後の状態



(3) 北方より見た16・17号土壙
(4) 北方より見た16号土壙における柄杓の出土状態



(1) 北方より見た18号土壙における遺物の出土状態



(2) 北方より見た19号土壙における遺物の出土状態 (3) 西方より見た19号土壙



(1) 北方より見た 20 号土壙



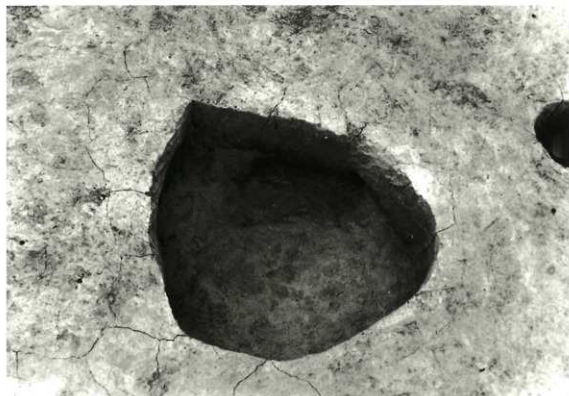
(2) 北方より見た 21 号土壙



- (3) 西方より見た 22 号土壙における漆器蓋の出土状態
 (4) 東方より見た 22 号土壙における漆器椀の出土状態
 (5) 東方より見た 22 号土壙における漆器椀・庵丁の出土状態



(1) 北方より見た23号土坑における遺物の出土状態



(2) 北方より見た25号土坑



(1) 北方より見た26号土壙



(2) 南方より見た28号土壙における遺物の出土状態



(1) 西方より見た 29 号土塋



(2) 西方より見た 30 号土塋における遺物の出土状態



(1) 北方より見た 31 号土壙

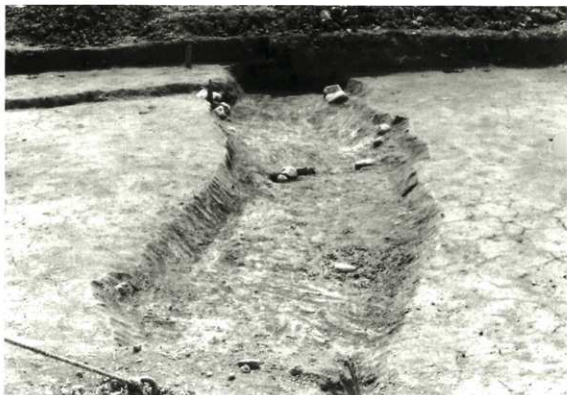


(2) 北方より見た 32 号土壙における遺物の出土状態 (3) 西方より見た 32 号土壙における遺物取り上げ後の状態





(1) 北方より見た 33号土壙における遺物の出土状態 (2) 東方より見た 33号土壙における遺物取り上げ後の状態



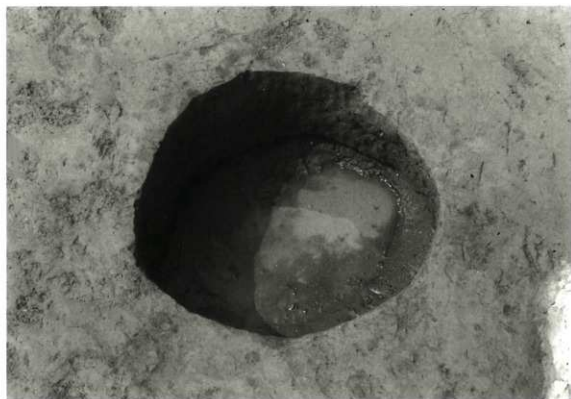
(3) 西方より見た 11号溝



(1) 南方より見た34号土壙における遺物の出土状態



(2) 北方より見た34号土壙における遺物の出土状態



(3) 北方より見た35号土壙



3



9



11



8



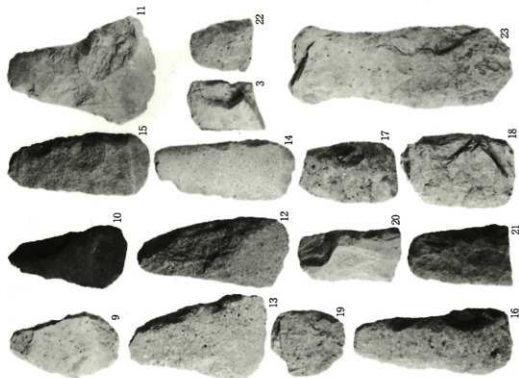
10



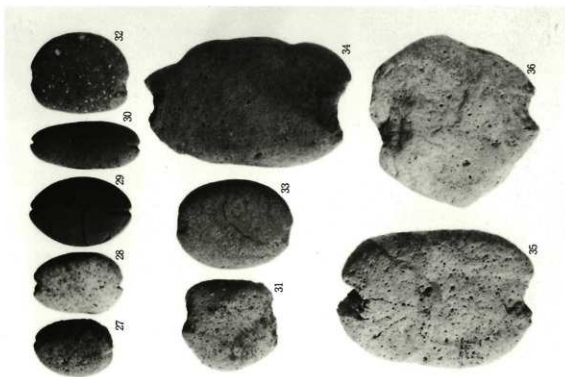
20



24



(1) 打製石斧



(2) 石 鏃



2



4



3



6



7



9



11



17



16



22



26



32



25



24



28



45



36



65



176



60



71



89



152



90



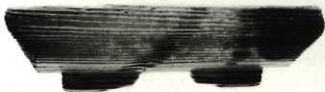
192



188



203



3

1

2

15

4

5

6

7

37

38



8



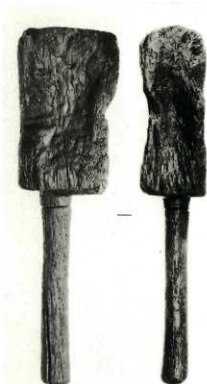
11



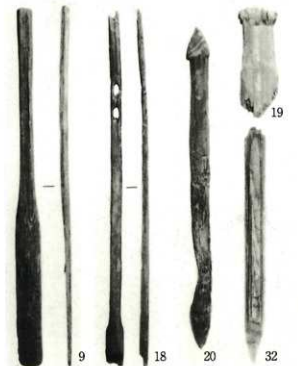
14



16



12



9

18

20

32

19



26



10



17



24



23



36



34



35



42



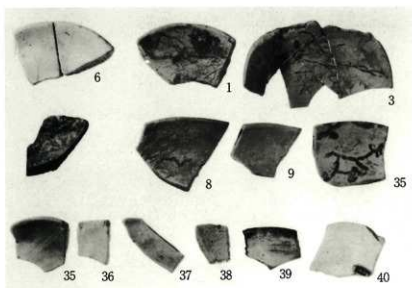
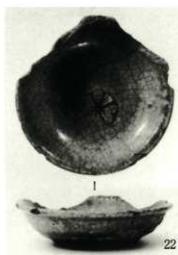
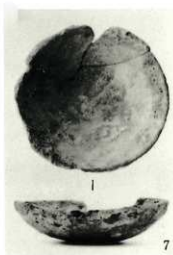
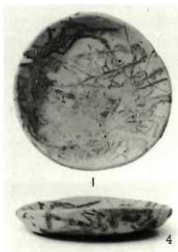
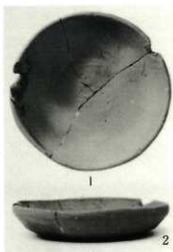
30

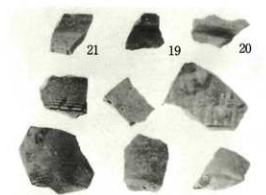
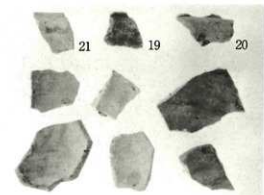
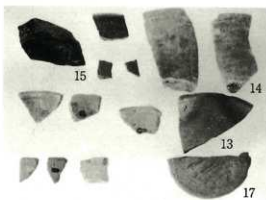
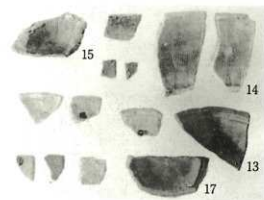
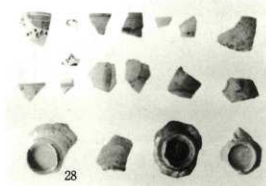
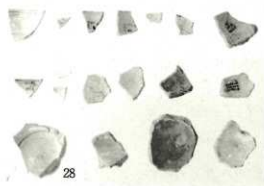
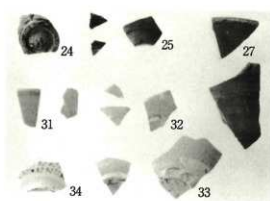
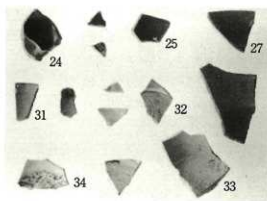


29



39







1



3



4



6



1

1



2

5



8



9



1



7



10



13



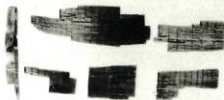
12



11



27



26